

力4,000kW)によるサーマルリサイクルを行なうことで、高い省エネ効果も兼ね備えている。現有施設(240トン/日)と併せて月間約2.3万トンの焼却処理が可能になり、一事業所としても国内最大級の規模になる。これまでの廃棄物処理事業で培ったノウハウを活かし、多種多様な産業廃棄物の処理に対応するとともに、サーマルリサイクルおよび燃え殻のマテリアルリサイクルなど再資源化にも対応した設備となる。

施設の概要は、敷地面積:約5万m²(新炉3万1,000m²+既存炉1万9,000m²)、方式:ロータリーキルン方式、処理能力840トン/日(新炉600トン/日、既存炉240トン/日)、処理品目:産業廃棄物(汚泥、廃アルカリ、廃酸、廃油、燃え殻、ばいじん、廃プラスチック他全18品目)、特別管理産業廃棄物(廃アルカリ、廃酸、廃油、感染性産業廃棄物、

特定有害産業廃棄物(廃アルカリ、廃酸、廃油、汚泥、燃え殻、ばいじん、鉱さい、有害物質を含むもの))。

DOWAグループは、秋田県、千葉県、岡山県、北九州市の中間処理および最終処理拠点を中心とした廃棄物処理事業を全国展開している。今回の千葉の増強は、国内最大の産業廃棄物発生地域の関東一円でのDOWAホールディングスのリサイクル事業強化につながり、グループ全体で年間約100万トンの廃棄物処理体制が実現する。DOWAホールディングスは環境・リサイクル事業をコアビジネスとしている位置づけ、集中的な投資を行なっているが、今年4月からスタートする次期中期経営計画(09~11年度)においても、さらなる投資を行なっていくとしている。

世界銅需要予測に基づく日本及び中国の非鉄金属リサイクルの現状と展望⑦ 橋本健一郎氏講演要旨

そしてリサイクル輸入原料についてだが、銅原材の輸入に関しては最高11万トン前後で国内需給バランスを保ってきたが中国が台頭してきた01年辺りから減少しだし05年にはここ10年間で最低の4万7,000トンまで落ち込み、しばらくの間国内原材が逼迫したのは記憶に新しいところであろう。

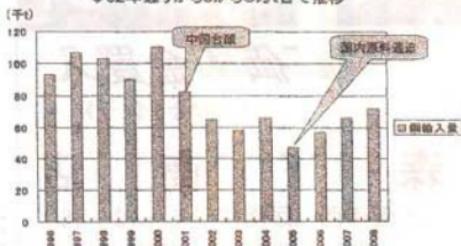
また、銅合金リサイクル原料輸入に関しては同様に2001年から減少しだし05年に最低の2万5,000トンまで落ち込み、現在3万5,000トンまで輸入量を増やすことができたが、リサイクル原料の輸入品の関しては為替動向や先にあげた中国などの海外のリサイクル原料引き合いなどの要因に左右さ

れることが多くまた品質面にも不安があることから国内需要のバッファー(調整)的要素が強く、資源戦略とは程遠いのが現状だ。

そして新興国及び発展途上国の経済発展に伴って経済的なスパイラルで下振れする時期はあれど全体としては銅消費量は堅調、2030年には現在の世界消費量の約2倍の3,500万トンとの予測がなされている。オバマ大統領率いるアメリカが掲げた新エネルギー革命、グリーンニューディール政策=世界各国がこの政策に同調し、CO₂削減、地球温暖化防止、OIL依存からの脱却、を目指すものと思われる。(了)

銅リサイクル原料輸入量

◆02年辺りから5から6万t台で推移



銅合金リサイクル原料輸入量

◆増減幅が小さく国内需要の調整弁

